

知的障害者スポーツの効果・影響に関する検討

The Effect of Sports Activities for Persons with Intellectual Disabilities

田 引 俊 和^{*1}、松 本 耕 二^{*2}
仲 野 隆 士^{*3}、渡 邊 浩 美^{*4}

要旨

本研究では、知的障害がある人たちに継続的なスポーツの機会を支援するスペシャルオリンピックス活動に着目して、その効果・影響に関する検討を行う。関係者を対象とした量的調査と分析の結果、「社会的な効果」「心理的な効果」「身体的な効果」という当該障害者スポーツ組織が掲げる基本理念と同様の因子を確認した。加えて、「活動への共感」因子も抽出された。

キーワード：障害者スポーツ(Disability Sports)／知的障害(Intellectual Disability)／
スペシャルオリンピックス(Special Olympics)

1. はじめに

(1) 障害者スポーツの経緯

障害者スポーツの発展においては、戦後イギリスのストークマンデビル病院でグッドマン博士が脊髄損傷者への医学的リハビリテーションにスポーツを取り入れたことが大きな起点の一つだとされる(藤田2008、高橋2004)。これらの影響を受けながら国内においても、1964年のパラリンピック東京大会(第13回国際ストークマンデビル国際大会)の開催、全国身体障害者スポーツ大会(第1回1965年)の実施、全国身体障害者スポーツ協会の設立(1965年)など社会全体でも拡大の動きがみられた。近年では、障害者のスポーツ活動は現在では広く知られるようになり、競技型、あるいは参加型などを問わず、様々な形で行われるようになってきている。全国障害者スポーツ大会(前身は身体障害者スポーツ大会)の開催、長野冬季パラリンピック(1998年)での日本選手団

の活躍などもみられる(日本障害者スポーツ協会、2009)。

制度政策面においても障害者スポーツを推進していることがうかがえる。たとえば障害者基本計画(2002年)では「障害者スポーツをより促進させることを目的に、障害者の利用しやすい施設・設備の整備の促進及び指導員等の確保、全国障害者スポーツ大会の充実、民間団体等が行う各種のスポーツ関連行事を積極的な支援、日本障害者スポーツ協会を中心とした障害者スポーツの振興、特に普及が遅れている精神障害者のスポーツの振興に取り組む」といった目標が掲げられていた。(内閣府2002、2003、2007)。加えて、2011年には新たにスポーツ基本法が施行された。ここでは第一条の目的、あるいは第二条の「国民の心身の健全な発達」「スポーツを通じた幸福で豊かな生活」という基本理念とともに、障害者スポーツについても「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じた必要な配慮をしつつ推進」と示されている(文部科学省、2011)。

スポーツ活動の目的には障害のある、なしに関わらず多様なものがあり、たとえば、健康・体力、気分転換・気晴らし、楽しみなどの報告がみられる(文科省2013、笹川スポーツ財団2014)。とくに近年では、健康やQOL志向の高まりに加

^{*1} TABIKI, Toshikazu
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
障害者福祉論、障害者スポーツ

^{*2} MATSUMOTO, Koji
広島経済大学 経済学部

^{*3} NAKANO, Takashi
仙台大学 体育学部

^{*4} WATANABE, Hiromi
公益財団法人スペシャルオリンピックス日本

え、誰もが年齢等を問わず参加できる生涯スポーツ(総理府2000、山口2004)という考えのもと、スポーツ活動は一部のエリートアスリートだけのものではなくなってきている。文部科学省による国民を対象とした全国調査(文科省2013)でもこの1年間に運動やスポーツを行ったとする者の割合は80.9%と高くなっている。

また、障害者スポーツに関しては、障害があってもルールや用具、補助具などの工夫でスポーツ活動への参加が可能であるとされ、「競技成績の比較ではなく個人的な成長やその過程で味わう感動に価値を置く(藤田2000)」という考え方も示されている。

(2) 研究目的

これまで障害者がスポーツ活動に参加する理由等についてはいくつか報告されている。たとえば、藤田(2003)が身体障害者施設を対象に行った調査では、年間行事、あるいは定期的に運動・スポーツをすることについて、楽しみ、親睦を図る、健康維持、QOL向上などが示されている。同様に知的障害児の参加理由については、コミュニケーションの学習や本人の楽しみといった結果が(守田・七木田2004)、また、知的障害者ではトレーニングプログラム、健康・体力といった因子(田引2012)が報告されている。

では、障害者スポーツの関係者は、その活動にどのような意味があると考えているのだろうか。本稿では、とくに知的障害がある人たちのスポーツ活動に関して、スポーツ活動への参加に対する関係者の意識の特徴を明らかにして、今後障害者のスポーツ活動推進のマネジメントに貢献できる基礎資料を得ることを目指す。

2. 障害者スポーツ組織の会員調査

(1) 調査方法

本研究では、知的障害者のスポーツ活動がどのような効果、影響があるのか、実際に活動に関わる人々を対象に調査票による量的調査を行った。

具体的には、知的障害者のスポーツ活動を支援しているスペシャルオリンピックス日本(以下、S O日本)組織を対象に、知的障害がある選手

(以下、アスリート^{注1)})のスポーツ活動への参加理由に関して調査分析を行なう。

調査票は2013年から2014年にかけてS O日本の地区組織を通じて直接、または郵送により配布した。調査の実施に際して、全て無記名調査票を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い個人が特定されない旨を調査票に記した。また事前に関係者に調査票の内容を示し確認と同意を得た上で配布した。複数の地区組織で同じ調査票を用い、最終的に約1200件の回答を得た。

なお、本来ならアスリート本人に直接その意識等を確認すべきではあるが、調査用紙を用いた形では得られる回答に妥当性を欠く可能性がある。そのため本研究では、知的障害当事者ではなく障害者スポーツ組織の関係者^{注2)}、および保護者等(以下、ファミリー^{注3)})を対象として、「回答者が考える、スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響」について調査、分析を試みた。

(2) 調査項目と分析方法

質問項目は大きく2群で構成した。一つは「スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響」に関する質問22項目で、先行研究(田引他2014、2012)、および事前のインタビュー調査をもとにスポーツ場面に加え生活場面をも意識した質問群を設定した。同様にもう一群で、「スペシャルオリンピックス活動が回答者本人に及ぼす効果・影響」など25の質問項目を設定した。それぞれ「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階尺度で得点を与え、因子分析により分析を行った。

(3) 調査結果①「回答者の属性」

回答者1196人の基本的属性を以下に示す。スペシャルオリンピックス地区組織での役割、立場については、理事役員等が25名(2.1%)、ファミリーでもあり理事役員等が65名(5.4%)、コーチボランティア176名(14.7%)、ファミリーでもありコーチが116名(9.7%)、コーチ以外のボランティア84名(7.0%)、ファミリーでもありコーチ以外のボランティアが84名(6.8%)、とくに役割

などがないファミリーが515人（43.1%）、その他50人（4.2%）であった（表1）。「コーチボランティア」、「ファミリーでもありコーチ」「とくに役割などがないファミリー」の3者で全体の7割近くとなっている。その他、回答者の属性を表1に示す。

(4) 調査結果②「スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果」

スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果、影響について、22の質問項目の因子分析（固有値1基準、主因子法、バリマックス回転）により、「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という3つの因子を抽出した（表2）。

信頼性 α 係数は、第1因子.92、第2因子.89、第3因子.87であった。因子間相関は、それぞれ有意に高かった。

(5) 調査結果③「スペシャルオリンピックス活

動が回答者本人に及ぼす効果」

スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果、影響について、25の質問項目の因子分析（固有値1基準、主因子法、バリマックス回転）により、「スペシャルオリンピックス活動への共感」「身体面への影響」「社会生活への影響」「心的・精神面への影響」という4つの因子を抽出した（表3）。

信頼性 α 係数は、第1因子.88、第2因子.90、第3因子.84、第4因子.83で、有意な因子間相関を確認した。

3. 考察

(1) 知的障害スポーツの効果・影響

本研究では、知的障害がある人たちに継続的にスポーツ活動を支援している「スペシャルオリンピックス」の効果・影響について、SO関係者はどのような意識を持っているのか検討を行った。複数の地区組織から得た約1200件の回答の22の質問項目を分析した結果、アスリートに対する効

表1：回答者の基本属性（n=1196、欠損値があるため合計が異なる）

項目	カテゴリー	人数	%
SOでの役割・立場	理事・役員等	25	2.1
	ファミリーでもあり理事・役員等	65	5.4
	コーチボランティア	176	14.7
	ファミリーでもありコーチ	116	9.7
	コーチ以外のボランティア	84	7.0
	ファミリーでもありコーチ以外のボランティア	81	6.8
	とくに役割などがないファミリー	515	43.1
	その他	50	4.2
	欠損値	84	7.0
SO活動の頻度	ほとんど参加していない（賛助・寄付等のため）	217	18.1
	年に数回程度	192	16.1
	月に1～2回	503	42.1
	週に1回程度	206	17.2
	週に2～3回	40	3.3
	週に4日以上	6	0.5
	欠損値	32	2.7
SOでの活動期間	1年未満	89	7.4
	1年～5年	429	35.9
	5年～9年	314	26.3
	9年以上	326	27.3
	欠損値	38	3.2
回答者の年齢層	10代-20代	93	7.7
	30代-50代	764	63.9
	60代以上	317	26.5
	欠損値	22	1.8

表2：SO活動がアスリートに及ぼす効果・影響

因子と質問項目	I	II	III	
社会的効果				
(スポーツ以外の)日常生活上の動作が高まった	.739	.253	.290	
(スポーツ以外の)日常生活上の質が高まった	.721	.299	.252	
仕事・学校などに前向きに取り組めるようになった	.714	.319	.191	
衝動性、攻撃性などが低減された	.672	.185	.179	
食生活を意識するようになった	.662	.152	.195	
集団行動、チームワークなどできるようになった	.659	.379	.243	
まわりの人とのコミュニケーション力が向上した	.610	.391	.201	
SO以外でもスポーツへの関心が高まった	.564	.230	.287	
自分のそれまでのスポーツ経験が活かしている	.554	.213	.216	
地域社会とのつながりが増えた	.493	.291	.257	
心的・精神的効果				
SO活動のある日を楽しみにしている	.184	.725	.278	
多くの仲間ができてうれしい	.328	.645	.166	
SO活動がある生活に満足している	.266	.596	.382	
自分への自信が高まった	.378	.568	.397	
大会や競技会参加などがんばる目標ができた	.352	.522	.229	
こころの健康に役立っている	.365	.506	.455	
家族の絆、家族関係がよくなることに役立っている	.422	.469	.286	
自分の健康状態には満足している	.316	.343	.316	
身体的効果				
身体的な健康に役立っている	.276	.288	.809	
体力面の向上につながっている	.275	.300	.721	
運動の機会としてちょうどいい	.237	.255	.714	
スポーツの技術面が向上した	.417	.297	.522	
	α 係数	.92	.89	.87
下位尺度間相関、平均±SD	I 3.28±0.69	-	.75**	.66**
	II 3.87±0.68	-	-	.72**
	III 3.92±0.75			-

果・影響として「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」の3つの因子を確認することができた。

これらは当該スペシャルオリンピックス組織の基本理念としてゼネラルオリエンテーション標準テキスト^{註4}の冒頭にも掲げられている「スペシャルオリンピックスは、スポーツのトレーニングと競技に参加することが、知的障害のある人々にとって身体的、知的、社会的、そして精神的に効果があると信じています。」と合致するものである。参加者がこの知的障害者スポーツ組織の基本理念を意識している、あるいは共有していると

いう結果が得られたことは非常に意義あるものといえる。

また、コーチやコーチ以外のボランティア、ファミリーについても、関連する25の質問項目から「身体」「社会生活」「心的・精神面」という因子が確認できアスリート同様にSO活動の基本理念の具現化につながっていると考えられる。加えて、回答者自身への効果・影響として「スペシャルオリンピックス活動への共感」因子も得られた。これはアスリートやファミリーに加え、コーチなどのボランティア活動への参加動機にも関係していると推察する。ここで得られた結果を大切

表 3 : S O活動が回答者本人に及ぼす効果

因子と質問項目	I	II	III	IV	
スペシャルオリンピックス活動への共感					
S O活動がある生活に満足している	.784	.226	.200	.045	
S O活動のある日を楽しみにしている	.705	.375	.169	.151	
自分自身の心的な成長に役立っている	.630	.243	.297	.366	
多くの仲間ができてうれしい	.619	.254	.188	.348	
S O活動の理念・方針には共感している	.582	.039	.139	.222	
S O活動がうまくいくように自分なりにがんばっているつもりだ	.529	.258	.124	.203	
こころの健康に役立っている	.475	.260	.338	.440	
自分の健康状態には満足している	.405	.249	.247	.168	
S O活動に係る費用負担などはあまり気にならない	.355	.001	.142	.122	
身体面への影響					
体方面の向上につながっている	.294	.717	.339	.160	
スポーツの技術面が向上した	.064	.695	.201	.281	
運動の機会としてちょうどいい	.349	.678	.169	.113	
身体的な健康に役立っている	.293	.636	.283	.319	
食生活を意識するようになった	.047	.518	.417	.257	
自分への自信が高まった	.403	.450	.429	.298	
(スポーツ以外の) 日常生活上の動作が高まった	.320	.411	.692	.153	
社会生活への影響					
(スポーツ以外の) 日常生活上の質が高まった	.415	.339	.661	.191	
仕事・学校などに前向きに取り組めるようになった	.374	.297	.552	.348	
S O以外でもスポーツへの関心が高まった	.207	.342	.500	.382	
家族の絆、家族関係がよくなることに役立っている	.386	.273	.475	.161	
心的・精神面への影響					
自分のこれまでのスポーツ経験が活かしている	.170	.373	.084	.607	
地域社会に対する意識が高まった	.296	.164	.380	.604	
スポーツの指導法についてもっと勉強したいと思う	.223	.372	.096	.575	
障害がある人たちに対する意識が高まった	.358	.103	.256	.542	
他の人のことを理解しあえるようになった	.437	.151	.414	.474	
	α 係数	.88	.90	.84	.83
下位尺度間相関、平均±SD	I 3.65±0.66	-	.68**	.73**	.70**
	II 3.06±0.81		-	.80**	.67**
	III 3.14±0.80			-	.70**
	IV 3.36±0.81				-

にして、かつ、関係者で共有、発信しながら今後の活動推進、およびアスリートや新規ボランティアの確保、既存活動者の継続性など、知的障害者スポーツの推進に貢献していくことを期待する。

(2) まとめと今後の課題

本稿では、スペシャルオリンピックス活動がア

スリートやボランティア等に及ぼす効果・影響について検討を行ってきた。その結果、「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という活動の基本理念と同様の3つの因子を確認した。そのうえで、ここでの結果を一般化する限界と今後の課題に触れる。

まず、アスリートへの効果・影響については本

人ではなく回答者の意向が反映されている。アスリート本人への調査であれば精度は高まると考える。

また、活動の効果として「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という3つの因子が確認できたが、それぞれどれぐらいの効果があつたのか具体的な測定、分析を行えていない。今後はこれらを意識して継続調査を行なう必要がある。

謝辞

本研究は科研費(基盤研究C、24500765)の助成を受けたものである。また、本調査の実施には、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本、ならびに関連地区組織等に多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

なお、本稿は「スペシャルオリンピックス日本20年の検証(2014年12月、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本発行)」の筆者担当部分(p34-38)をもとにしたものである。

〈注〉

- 1) 知的障害者のスポーツ活動を支援しているスペシャルオリンピックスでは、この組織内でスポーツ活動に参加する知的障害者を「アスリート」と呼んでいる(スペシャルオリンピックス日本編2014)。
- 2) 同様に、この知的障害者スポーツ組織では、当事者とともにスポーツ実践する人を「コーチ」としている。ほかに、運営マネジメントに携わる理事役員等が構成メンバーとなっている(スペシャルオリンピックス日本編2014)。
- 3) スペシャルオリンピックス組織では、知的障害があるアスリートの家族を「ファミリー」と呼んでいる(スペシャルオリンピックス日本編2014)。本稿においては、おもにアスリートの保護者として扱っている。
- 4) スペシャルオリンピックス組織では、コーチクリニックと称する研修を実施しており、その中の1つに「ゼネラルオリエンテーション」という講義が設けられている。

〈文献〉

- 藤田紀昭(2008)『障害者スポーツの世界』角川学芸出版
藤田紀昭(2003)『身体障害者施設における運動・スポー

ツの実施状況に関する調査研究—障害者に対する運動・スポーツプログラム普及のための基礎資料—
障害者スポーツ科学、1(1)。

藤田紀昭(2000)障害者と地域スポーツ～地域スポーツ振興と統合をめぐる～、『障害者問題研究』、27(4)、p55-58。

『北陸体育学会紀要』第48号p13-21(2012)

文部科学省(2011)スポーツ基本法～スポーツの力で日本を元気に～、文部科学省、東京

文部科学省『体力・スポーツに関する世論調査(平成25年1月調査)』

守田香奈子・七木田敦(2004)知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究。障害者スポーツ科学、2(1):70-75。

内閣府編(2007)障害者白書平成19年版。佐伯印刷:東京。

内閣府編(2003)障害者白書平成15年版。国立印刷局:東京。

内閣府編(2002)『障害者白書平成14年版』東京コロニー。

日本障害者スポーツ協会『障害者スポーツの歴史と現状』日本障害者スポーツ協会、2009。

笹川スポーツ財団(2014)『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』、笹川スポーツ財団。

総理府編(2000)『障害者白書平成12年版』大蔵省印刷局。

スペシャルオリンピックス日本編(2014)ゼネラルオリエンテーション標準テキスト。スペシャルオリンピックス日本:東京。

田引俊和(2014)『知的障害がある人たちのスポーツ活動からの休止、離脱に関する一考察』北陸学院大学研究紀要第7号。

田引俊和(2012)『知的障害のある人たちがスポーツ活動に参加する理由』北陸体育学会紀要、第48号。

高橋明(2004)『障害者とスポーツ』岩波新書。

山口泰雄(2004)『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社。